

# 専門学科における総合的な学習の時間を通じた進路探求について

M16EP012  
森澤 公美子

## 1 問題と目的

### (1) 全国的な状況

平成11年12月、中央教育審議会答申において「キャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」とし、「キャリア教育の実施に当たっては家庭・地域と連携し、体験的な学習を重視するとともに、学校ごとに目的を設定し、教育課程に位置付けて計画的に行う必要がある」と提言されている。その背景には、20世紀後半におきた地球規模の情報技術革新などに起因する社会経済・産業的環境の国際化、グローバリゼーションがある。このような社会構造の変革は、子どもたちの成育環境を変化させると同時に子どもたちの将来にも多大な影響を与えかねない。平成23年1月、中央教育審議会はキャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と改めて定義し、職業教育は「一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育」と定義している。また、基本的なこととして、専門学科における職業教育の重要性について、中央教育審議会答申は地域の産業・社会においてどのような人材が求められているのかを把握し、その需要にこたえていくことが必要であると述べている。

### (2) 専門学科における進路指導の状況

厚生労働省(2016b)の新規高校卒業就職者の離職状況調査では、平成24年度新卒者における就職1年目から3年目までの離職率が、約40%と報告されている。高校を卒業し就職した時点では、3年後の離職を想定している生徒はいないだろう。仕事を行う中で、何らかの困難に直面し離職するケースが、依然として多いことが伺える。

また、専門高校では普通科高校に比べて、現在も学校経由の就職システムが機能している(本田, 2009)。職業安定所で高校生求人を受け付け、確認印を押された求人票が学校に届く。生徒は学校に届けられた求人票に記載されている業種や勤務体制と自分の適性を相互に吟味し、教師と相談の上、選考試験を受ける企業を決定する。一見、生徒の希望を尊重した進路選択が行われているように見えるが、求人票が届いた時点で初めて具体的な進路を考えるという状況も起こっている。

酒井(2007)は、入学時に注目した研究において、高校教育や専門教育への動機づけをもたない生徒が専門高校に入学するという事態も指摘している。消極的な意思で入学し、卒業後のビジョンを持たないまま高校生活を送り3年次の進路選択を迎えることもあり、安易な進路選択に繋がる可能性もある。

### (3) A 高校工業科における進路指導の現状

A 高校工業科においても、進路実現を目指した教育活動が行われている。しかし、高校卒業後、高校生活とのギャップから社会生活への適応に時間を要したり、想像とは大きく違った経験から、悩みを抱え離職や退学を選択してしまう者も存在している。社会に直結する専門学科において、生徒自らが主体的に進路選択を行うための授業を展開する意義は大きいと考える。

さらに、A 高校工業科は入試を一括募集で行い、1年次前期(入学~9月)の間は、工業科の基礎的知識(工業技術基礎実習、工学数理)について共通して学ぶ。その後、1年次後期(10月)から各4学科(機械工学科、電子工学科、制御工学科、環境工学科)に分かれ、卒業まで専門学科における学びを深めていく(図1)。各4学科における専門的学習内容が、卒業後の就職先や進学先に大きく影

響するため、1年次における学科選択は非常に重要な要素を含んでいる。将来どのような職業に就きたいのか具体的にイメージできないまま学科を選択してしまうと、自己の進路実現に大きな障害となってしまう。

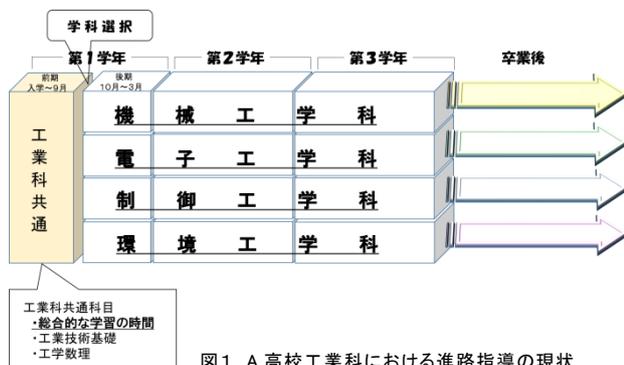


図1 A 高校工業科における進路指導の現状

#### (4) 研究の目的

このA高校工業科において、重要な位置づけにある学科選択に臨む生徒に対して、総合的な学習の時間を活用し、有用な「進路探求プログラム」を構築すべく、そのプランニングを具体的に試みることで、それが本研究の目的である。

A高校工業科1年次では、各4学科の専門的学習内容を学ぶ職業教育は実施されているものの、自己の卒業後の進路を主体的に考察するためのキャリア教育は十分とはいえない。進路実現に直結する各4学科での専門的学習へと移る前に、生徒自らが将来のビジョンを十分にイメージした上で学科選択を実現するためには、総合的な学習の時間が果たすべき役割は大きい。

本研究では、A高校工業科を想定しつつ、卒業後の進路を見据え主体的に学科選択を考え、進路選択に必要な知識や情報を得るための基本的な視点を明らかにし、総合的な学習の時間を「進路探求プログラム」として構築することを試みる。

## 2 方法

実習校：山梨県内公立B高等学校

「進路探求プログラム」のプランニングに向けた基礎的研究作業として、(1)文献調査、(2)実習校教師への聞き取り調査、(3)高卒者採用企業社員への聞き取り調査、(4)実習校授業観察を実施する。それらの調査結果を踏まえつつ、プラン作成に向かう。

## 3 調査結果と考察

### (1) 文献調査

総合的な学習の時間では、全体計画及び年間指導計画の作成に当たっては、学校における全教育活動との関連の下に、目標及び内容、育てようとする資質や能力及び態度、学習活動、指導方法や指導体制、学習の評価の計画などを示すこととされている(文部科学省、2009)。

このことから、A高校の教育目標を踏まえ、プログラムの目標を、「高校卒業後の進路を意識して学科選択を行う。卒業後の進路を主体的に考え、進路に関わる目標を持つ」とするのが妥当といえる。

花井・清水(2012)は、1年次からの選択の違い(就職・進学・未定)によるキャリア発達は2年次まで影響していることが見受けられるため、「1年次での進路選択を念頭に入れての支援が効果的」だと報告している。児美川(2013)は、次のように述べている。「なぜ、“その職業(仕事)をやりたいと思うのか”の根っこに存在するもの、人を支援したいとかコツコツと物事を地道にやり遂げることに満足感を感じるとか、といったより深いレベルでの『価値観』については、十分に意識化しておいたほうがよい。(中略)大切なのは、職業(仕事)それじたいではなくて、自分の『軸』に基づく価値観を実現することであると気づけるはずだからである」。前述したようにA高校工業科1年生は、前期末(9月末)に学科選択を行うことから、入学して間もない1年次前期に高校3年次の進路選択を念頭に入れたプログラム内容を実施する必要がある。

る。しかし、進路に関する多くの選択肢を持ち合わせていない1年生が、具体的に卒業後の進路を決めようとするれば、他者から勧められた進路や友達と一緒にの進路など、主体性を欠いた進路を選びかねないという懸念がある。早い時期から進路選択を考えることとは、自分はどのようなことに興味があつて、何を大切にするのかという自分の価値観を、早い時期から認識していくということであると考えられる。生徒が主体的に選択した進路とするためにも、高校入学後から自分の価値観を意識し、卒業後の進路を具現化するための意味あるプログラム内容を考案したい。

主体的に進路選択を考えるプロセスは、自己を知ることと多様な進路選択の在り方を知ることが相互に関連付けられ、自己の可能性を模索していく過程である。

厚生労働省管轄の国家資格であるキャリアコンサルタントは、自分の適性や能力、関心などに気付き、自己理解を深めるとともに、社会や企業内にある仕事について理解することにより、その中から自身に合った仕事を主体的に選択できるようにすることを目的としている(厚生労働省, 2016a)。このキャリアコンサルタントの目的は、専門学科における進路指導の目的と多くの点で共通している。このような理由から、図2のようにも整理されているキャリアコンサルタントの視点や内容を、本研究のプログラム作成において参考としたい。

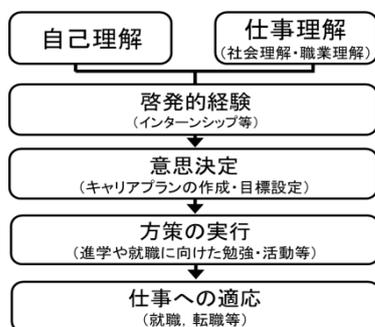


図2 キャリア・コンサルティングの流れ  
(厚生労働省 HP を基に作成)。

## (2) 聞き取り調査

紙幅の関係上、プログラム作成において特に関係が深い回答のみを掲載する。なお聞き取り項目は以下に示す内容である。

- ◎高卒就職者の早期離職をどう感じているか
- ◎卒業後の進路に関して、生徒が高校在学中にできることや教師ができることはあるか
- ◎インターンシップをどう捉えているか

### ① 実習校 B 高校教師より

実習校 B 高校において、教師への聞き取り調査を行った結果、以下の回答を得た。

教師 A ;

- 世の中には様々な人がいる。高校の時期から他者の多様性を認め、視野を広げられるようにしたい。
- 専門教科以外でも地元を知り深める活動を取り入れたい。また地元観光業で本校生徒がお手伝いさせてもらえたらと思っている。地元活性化につなげるためにも、生徒の活躍に期待している。

教師 B ;

- 生徒は仕事に対するイメージや知識が少ない。子どもが親の働いている姿を見ることが少ないし、親も子どもに対して仕事を語ることが少ないと感じる。教師が多くの仕事を語ることはできないが、教師という仕事を生徒に語ることで、少しでも仕事へのイメージを持てるとよい。インターンシップを有効に機能させることで、自分がイメージしていたもの以外の様々な側面が見えてくると思う。
- 授業において自分で考えて行動する力をつけさせたい。教師が全部指示してしまうのではなく、生徒が考えみんなで協力して作業を行うことで、社会に出てから例え困りごとがあつたとしても、自分で解決の糸口を見つけていけるのではないかと。

教師 C ;

- 自分の性格などを把握していないのか、自分の適性と希望する仕事内容にずれが生じているように感じる。仕事には様々な側面がある。接客業と言っても、お客さんと話をするだけではないということが認識できていないことがある。世の中の仕事をもっと知る必要がある。

以上3名の教師の聞き取りから、多様な価値観の受容、地元を知ること、職業への理解や働くことへのイメージ、主体性・協働性、自己に対する認識の大切さが挙げられた。

## ② 高卒者採用企業社員より

高卒者採用を行っている企業で働く社員3名（K社・N社・Y社）への聞き取り調査を行った結果、以下の回答を得た。

K社社員；

- 異年齢間のコミュニケーションがうまく取れないため、業務がスムーズに遂行できないことがある。このようなことが重なっていくと、社内での気まずさを感じて離職につながってしまうのではないか。
- 部活をやっておいた方がいい。問題解決能力が養える。大会や出品など、1年間の中でもいくつかの目標に向かって努力をするから。勝つためにはどうしようか、上位に入るためにどうしたらよいかと考えて、努力する精神が身に付くので。

N社社員；

- 上司とのコミュニケーション感覚や社会人マナー認識の違いで悩む若い社員がいる。例えば、会社を休む時は電話を入れるのが当たり前だという考えの上司がいるのに対して、休む連絡をSNS等で伝える若い社員がいる。若い社員は、電話で休む連絡をするという手段（概念）を知らない。全く悪気はない。しかし上司は、あいつは常識が無いと認識する。ぎくしゃくした関係が始まる。

Y社社員；

- 高卒者と大卒者で、例え同じ年齢であっても高卒者の方が細かい指示を与えないと動けないことが多い。具体的な指示に対しては遂行してくれるのだが、先回りして考え、率先して行動しようとする姿勢は少ない。
- 高校生は年齢が離れた人と、同じ空間で作業を行うという経験が少ない。在学中疑似的に体験することも難しいと思うが、社会に出ると異年齢間のコミュニケーション能力がかなり必要であることを認識しておくことは大切。
- インターンシップに来る前に

模擬面接のようなことをやっておくとよい。生徒と会社の人との事前打ち合わせの時、初対面の人との会話になるので、知らない人に対してどういう言葉遣いや態度で臨んだらよいかを確認しておいた方がいい。インターンシップ最中も、基本的なことだが、あいさつ・正しい日本語・時間を守ることは、当たり前にしておいてほしい。“俺、何すればいいですか？”は正しい日本語ではない。帰りも“さようなら”だけでなく、“お先に失礼します。明日もよろしくお願ひします”と学校とは違う言葉遣いを少し使える方が好感度が上がる。

以上3名の社員の聞き取り調査から、異年齢間コミュニケーション能力、問題解決能力、協働性、先を読んで行動する力、社会人マナーの重要性が挙げられた。

## (3) 実習校授業観察

5月から12月まで毎週月曜日、2時間連続で展開される授業を参観した。主に生徒が知識を得る時間、その後、班ごとに課題を解決する時間という流れで構成されていた。教師は、生徒がこれまで得た知識を活用して課題を解決できるように課題設定を工夫し、生徒の主体性や協働性の育成を主なねらいとしていた。生徒は限られた時間の中で課題を解決するために、器具の選定、行動計画、班員の役割分担等を行っていた。約8か月間の授業観察を通して、課題に対する生徒の解決力が明らかに向上している様子を見ることができた。具体的には、班員で話し合い協力して課題を解決する力、班員の個性を活かした役割分担、作業工程に応じた行動力、個々の知識・技能の定着等である。

生徒が主体的に行動し課題を解決するためには、教師が生徒の既知している知識量を把握し、新たに必要とされる情報を提供すること、課題解決に向かう思考過程を予測することが不可欠である。さらに、限られた時間の中で解決できる課題を設定することが重要である。そして、生徒の主体的な解決を促した

めに、教師は解決策を与えるのではなく、あくまで解決の糸口を与えることに留めることも大切である。授業観察で得られたこのような視点も、プログラムの教材作成及び展開案の参考とした。

以上、先行研究及び文献調査、実習校教師及び社員への聞き取り、授業観察を踏まえ、自己を知ることから、職業や働くこと・多様な進路を知ることへと展開するプログラムとした。そして、プログラム終了時点で、これまでの学びと自分を相互に関連付けて省察する構成とした。また、主体性や協働性の大切さやコミュニケーションの重要性について、プログラムユニット作成における視点とした。

#### 4 「進路探求プログラム」の構築

##### (1) 総合的な学習の時間を活用したプログラム (プラン)

表1が、プログラムを構成する各ユニット名である。本プランは5つのユニットで構成される。

表1 総合的な学習の時間  
進路探求プログラム 構成ユニット

1	自己を知る
2	進路をイメージする
3	地域の産業を知る
4	インターンシップ事前学習を通して働くことを考える
5	進路に向けて課題意識をもつ

なお、具体的な実施計画について、最終頁に掲載した。

##### (2) プログラムユニット全体を通して

プログラムの実施後において、自分自身の進路に対する意識の深まりがあること、そして、その意識の深まり自体を生徒自身が視認化することが重要であると考え。総合的な学習の時間オリエンテーションにおいて、プログラムの意図（学科選択前までに卒業後の

自分の進路をイメージするために実施するプログラムであること）を説明する。その後の実践では、自己を知るための活動と多様な進路を知る活動を行い、自分と多様な進路を相互に関連付けて考察する活動を行う。そしてプログラム終了後、学科の選択理由が卒業後の自分の進路のイメージに基づいているかを確認する。さらに総合的な学習の時間を通して生徒の学びが深まったかを確認する。

また、実施教師にとってプログラムのねらいがわかりやすく、運用が煩雑でないことが重要であると考え、生徒が記入するワークシートとは別に、プログラムユニットの意図や授業進行方法等を掲載した教師用冊子を作成した。

##### (3) 各ユニットについて

###### 1 自己を知る

本研究での自己を知る目的は、多様な進路と相互に結び付けて探求していくためである。

職業適性（※人と職業（役割）とのふさわしさ）は、かつては「能力的適性」だけに注目した捉えられ方をされることが多かったが、近年は、その人物のパーソナリティなど、能力以外の面も含めて、個人の特性を総合的に捉えるべきものであるという認識が広まっている（厚生労働省, 2012）。自分がどのような性格であり、どのようなことに興味・関心があり、何を大切にしたいのかといった価値観を知ること、自分に適した進路選択を行うことができる考える。

自己を知る活動は、自己肯定感を損なわないようにすることや、自己はこれからの生活において絶えず変化していくものと捉え、今後も理解を続けていくことが大切であることに留意する。また、抱く感情や気持ちを表現する言語が不足している場合もあるため、感情や性格を表す一般的な言語を補助的に示した教材を用いることとした。入学して間もない時期であるため、授業担当教師の生徒理解

にも役立つよう、自己についての文章（自己紹介文）にまとめる活動を取り入れた。

## 2 進路をイメージする

A 高校工業科1年生は、後期（10月）から4科のうちいずれか1つの学科を選択し卒業まで専門的な内容を学ぶため、学科選択の前までに将来どのような進路を選ぶのかイメージする必要がある。自分がやりたい・やれること・やるべきことは何なのか、それは高卒でできるのか、進学が必要なのかを吟味することが不可欠である。このプログラムユニットでは、卒業後の進路を見据えるために必要な、多様な進路に関する知識や情報を提供する。ここで言う進路に関する知識や情報とは、様々な職業理解と上級学校の理解についてである。職業理解とは、職業、産業、事業所、雇用・経済・社会状況を理解することである（木村，2010）。また、入学して間もない生徒が、進路に関する知識や情報と卒業後の自分を関連付けて捉えるために、卒業生の進路データを元に卒業後の進路の例を挙げて情報提供を行うことが望ましいと考える。

## 3 地域の産業を知る

A 高校工業科3年生は、就職希望者のうち山梨県内に就職を希望する生徒が多い（過去3年間のうち3年生全体で就職希望者が76%。そのうち90%が県内就職）。地元で働くことを望む生徒が多く、地元へ就職させたいという保護者の希望も強い。しかし、A高校における1・2年次の進路指導の中で、山梨県内の産業や地域に存在する職業に対する理解を深めるための指導が十分に実施されていないのが現状である。生徒が納得のいく進路選択を行うためには、1年次から県内にはどのような職業が存在しているのかを知り、自分の希望は県内でかなえられるのか、希望をかなえるために高校生活でできることは何かを模索する必要があると考える。このプロ

グラムユニットでは、山梨の産業や職業を知り、自分の進路の可能性を考える。また、現在と数年後の社会情勢が必ずしも一致していないことを推察し、AIやIoTの躍進による産業構造の変化等を踏まえ、多角的に進路について考察させる。

## 4 インターンシップ事前学習を通して働くことを考える

高校生は、家族や親戚、近所の人など身近に働いている人を通じて、自分なりの就労のイメージを形作っている。ただしそのような環境から得られる働くことへの情報は限定されており、生徒が抱く働くことへのイメージは偏りがあると推測される。働く人は様々な理由や目的を持って働いており、各々の職業を選択した理由は、生活環境や価値観によって多種多様である。進路選択には様々な視点があることを知り、自分の置かれている環境や自己の価値観と結び付けて進路を考える機会としたい。

勤労観や職業観を培い職業適性や将来設計について考える場として、インターンシップが推進されている。インターンシップは、コミュニケーションの重要性や仕事の大変さなど、身をもって体験できる重要な機会である。

しかしながら、古閑（2011）は、今日、インターンシップの一般化が進んだ結果、学生にとって、「インターンシップで何を学ぶか」ということよりも、「参加すること」そのものが目的となってしまっているケースがみられるようになってきていると指摘している。

インターンシップでの学びを、より現実味のある自分の将来に結び付けて学べる機会とするために、特に事前学習において、企業で何を体験しようとするのか、何を学んでしようとするのかといった、個々人が視点を持つ活動を取り入れたい。何の視点もなく体験に行くのと、何かを学ぼうとする視点を持つ

ていくのとは、学びの質が異なってくると考える。このプログラムユニットでは、インターンシップ事前学習としてその意義を学ぶとともに、働く際に必要なスキルや職業選択の多様な価値観を知り、個々人が仕事現場で学び取る視点を持つ活動を実施する。

## 5 進路に向けて課題意識をもつ（総括）

前述したように、本研究では自己と多様な進路とを相互に結び付けて思考し、卒業後の進路を踏まえて学科選択に臨むための進路探求を実施する。卒業後のライフスタイルに見通しを立てるとともに、高校生活での目標を持つことが大切である。このプログラムユニットでは、これまでのプログラムユニットでの学びを踏まえて、卒業後のライフプラン・キャリアプランを立てて学科選択を考えるとともに、自己の高校生活の目標を設定する活動を実施する。

## 5 おわりに

来年度は、今年度作成した総合的な学習の時間「進路探求プログラム」を実際に適用した現場での実践を通して、その有効性について検証する予定である。そして、そこで得られた検証結果を踏まえ、他の専門学科の総合的な学習の時間等へ利用もできるのか、その可能性も探りたい。

本研究では、文献調査や実習校で得られた知見、企業での聞き取り調査等をもとに、卒業後の進路を踏まえた学科選択を行うための視点を明らかにし、進路探求プログラムを作成した。この研究で得られた視点に基づいた教育活動は、総合的な学習の時間の授業内だけで完結してしまうのではなく、高校生活全般において教師・生徒共に継続していくことが大切であると考えます。

また、本研究において企業で働く社員への聞き取り調査を行った際、次のような話があった。「教師は会社に比べて、上司・同僚・顧

客という概念が少なく、社会の仕組みをあまり体感的に知らない。社会に出る生徒を目の前にして教える教師が、まずは多様な世界を知ることが大切なのではないか。」筆者自身、社会への知識を増やし、社会を語るための素養を養うことも今後の課題である。

## 引用文献

- 一般社団法人雇用問題研究会. 2017.[http://www.koyoerc.or.jp/school/assessment\\_tool.html](http://www.koyoerc.or.jp/school/assessment_tool.html). (2017.2.1.閲覧)
- 木村周. 2010. キャリアコンサルティング理論と実際. 一般社団法人雇用問題研究会.
- 厚生労働省. キャリアコンサルティング. 2016a. [http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou\\_roudou/shokugyounouryoku/career\\_formation/career\\_consulting/index.html](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/shokugyounouryoku/career_formation/career_consulting/index.html). (2017.2.1.閲覧)
- 厚生労働省. 新規学卒者の離職状況. 2016b. <http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000137940.html>. (2017.2.1.閲覧)
- 厚生労働省. 2012. 中学校・高校におけるキャリア教育実践テキスト. p86. 実業之日本社.
- 古閑博美. 2011. インターンシップーキャリア形成に資する就業体験ー. pp.39-40. 学文社.
- 児美川孝一郎. 2013. キャリア教育のウソ. ちくまプリマー新書.
- 酒井朗. 2007. 進路選択への支援の必要性. 酒井朗編. 進学支援の教育臨床社会学ー商業高校におけるアクションリサーチー. pp.1-21. 勁草書房.
- 西村宣幸. 2008. コピーしてすぐに使える ソーシャルスキルが身につくレクチャー&ワークシート. 学事出版.
- 花井洋子・清水和秋. 2012. 専門高校での進路選択とキャリア発達ー工業高校生を対象とした縦断的調査からー名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属生涯学習・キャリア教育研究. 8. pp.23-30.
- 星野欣生. 2007. 職場の人間関係づくりトレーニング. 金子書房.
- 本田由紀. 2009. 専門高校生の職業への移行. 小杉礼子(編著). 若者の働きかた. pp.46-68. ミネルヴァ書房.
- 文部科学省. 2009. 高等学校学習指導要領. 第4章総合的な学習の時間. p351.

具体例) 4 インターンシップ事前学習を通して働くことを考える

総合的な学習の時間 実施計画

活動内容	
オリエンテーション	
進路適性検査	
私マップづくり	
マインドマップ 自己紹介文	1 自己を知る
私の対人関係地図	
適性検査結果の見方(外部講師からのアドバイスを聞く)	
就職・進学を考える(就職編)	
就職・進学を考える(進学編)	
さまざまな仕事と必要な学歴	
LIFE R.P.G.	2 進路をイメージする
インターンシップ体験職種を考える 体験先希望調査	
上級学校を知る1(授業「社会学」参加)	
上級学校を知る2(授業「社会学」参加)	
産業を知る	
山梨の統計	
地域の産業を調べる(卒業生の就職先)	3 地域の産業を知る
地域の産業を調べる(卒業生の就職先)	
地域の産業を調べる(企業調べ)	
地域の産業を知る(クラス内発表)	
これからの産業を考える	
インターンシップガイド	
働くとは	
協働について	
人物に学ぶ(職業A/VTRを見て多様な価値観や選択肢を知る)	4 インターンシップ事前学習を通して働くことを考える
ビジネスマナー(身だしなみ・敬語・電話のかけ方)	
インターンシップで何を学ぶのか	
体験先の企業や同様の業種について調べる	
体験先の企業や同様の業種について調べる	
資格について調べる	
希望する進路づくには(成績を確認する)	
ライフプランを立てる・進路探求まとめ	5 進路に向けて課題意識をもつ(総括)

◆◆◆インターンシップ事前学習を通して働くことを考える ◆◆◆
■ 単元目標
<ul style="list-style-type: none"> <li>・11月に実施される、インターンシップ(3日間)の意義とその流れを確認する。</li> <li>・「働く」ときに必要とされる知識や心構えについて知る。</li> <li>・インターンシップで学びの視点を育てる。</li> </ul>
■ 単元計画
<p>①インターンシップガイド (1h) (工業科合同)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・インターンシップの意義とその流れを確認する。</li> </ul> <p>②働くとは (1h)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜ働くのか、学校と職場の違い、会社の仕組み、労働形態について知る。</li> </ul> <p>③協働について(コミュニケーションの重要性) (1h)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・協働とは(グループミッションをクリアせよ)。</li> <li>・コミュニケーションの重要性を知る。</li> </ul> <p>④人物に学ぶ(多様な価値観や選択肢を知る) (1h)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・働く人が、その職業を選択した理由を知る。</li> <li>・自分は何を大切にしたいか、もう一度認識する。</li> </ul> <p>⑤ビジネスマナー (1h)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・就職してから必要とされる、社会人マナーを知る。</li> </ul> <p>⑥インターンシップで何を学ぶのか (1h)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校で実施されたインターンシップより、さらに自分の将来に則した体験にするために、①～⑤回の内容を踏まえて、個人がインターンシップで学び取る項目を設定する。</li> </ul> <p>⑦体験先の企業や同様の業種について調べる (1～2h)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体験先の企業や同業種の事業内容を調べる。</li> </ul>